

vol.14

選書者：川田都樹子

(甲南大学人間科学研究所 所長)

●『絵画論の現在（マネからモンドリアンまで）』

著者：藤枝晃雄

20世紀の日本の美術界でフォーマリズム批評の大家といえば藤枝晃雄。アメリカのフォーマリスト Clement Greenberg の紹介者でもある。藤枝の書籍の中でも私が最も敬愛し憧憬するのがこの1冊だ。1枚の絵画の上を、論者の目がどの順番で、どのように動き、どの部分を注視し、どの箇所を折り返したか、それら一連の流れがまず見事に分節化され言語化される。その緻密な記述があって、さらに言語による画面の再構築がダイナミックに展開されていく。読者がその言葉に導かれながら、論者とともに画面を辿りなおしその構成を把握していくとき、作品の有する美的「質」の正体を認識することになる。ひと目見ただけでゾクッとするほど惹かれる絵があったとしたら、その「ひと目惚れ」の理由を、的確な言葉で説明してくれるのがフォーマリズム批評だと言っている。その典型がここに詰まっている。しかも、これが出た1993年といえば、まだ「ポストモダン」流行の余燼くすぶる時期であり、「モダン」もフォーマリズムもバッシングの対象だった。その意味でも稀有の書籍だと思う。

●『赤の書 The red book : liber novus』『赤の書／図本版』『赤の書／テキスト版』

著者：C.G. ユング

カール・グスタフ・ユング（Carl Gustav Jung：1875－1961年）の死後半世紀近く封印されていた『赤の書』が公刊されたのは2009年だった。1913年に師と仰ぐフロイトからの訣別宣告を受けたユングは、直後から様々なおぞましい幻覚（ヴィジョン）に襲われ、再々陰惨な夢を見た。その詳細を丹念に書き起こし、手書きの装飾文字と緻密なイラストをつけ、豪華な革表紙で装丁し、さながら中世装飾写本のような形にしたのが『赤の書』だ。その制作は16年にわたり続けられたが、未完のまま封印されたていたのだった。

それが、2013年ヴェネチア・ビエンナーレに「作品」として展示された。ヴェネチア・ビエンナーレとは、1895年から続く「現代美術の祭典」である。もちろんユングは「美術家」ではない。思えば「現代芸術」は、それ以前から低迷していた。「芸術」の概念が曖昧になったせいで、常に他者としての「非芸術」の領域を措定しては、それに境界を「脅かされているかのように」振舞うことで、逆に「芸術」なる領域が未だ存在するかのように見せてきた。ジャン・ボードリヤールが「芸術の陰謀」と呼んだ、シミュラクルとしてしか存在しえない「芸術」の姿である。そしてついに、措定すべき「他者」にすら困窮する状況のなかで、「人間存在に内在する他者」としての、ユングのいう「集合的無意識」がクローズアップされた感があった。ユング『赤の書』は、そうした美術界の「最後の手段」（陰謀）になったように思う。

●『水曜の朝、午前三時』

著者：蓮見 圭一

今、甲南大学・人間科学研究所で映画製作プロジェクトを手掛けている。EXPO2025を見すえて、その前の大阪万博を再検証する、アート・ドキュメンタリー映画「EXPO' 70 前衛の記憶～アコを探して」というものだ。「アコ」というのは、1970年の万博で上映された映像作品「スペース・プロジェクト・アコ」のヒロインの名前である。新作映画は、甲南大学生の「アコ」が1970年の「アコ」を探す物語である。その映画のために学生たちと資料を集め、情報を収集していて、この本に出会った。EXPO' 70でホステス（コンパニオン）を務めた女性が死の床にあって語る当時の回想として、この本は書かれている。胸を焦がすような悲恋の記憶、不自由な時代に反発した女の生きざま。そして当時の深刻な世相や在日外国人に関わる社会問題。この本の中にも、私たちが探していた「アコ」がいた。タイトルが Simon & Garfunkel の名曲から取られているのも好きのところだ。

●『判断力批判（カント全集 8）』『判断力批判 上』『判断力批判 下』

著者：カント

キレイな花は、なぜ誰が見てもキレイなのか。

キレイな人は、なぜ誰が見てもキレイなのか。

「美しい」という判断は完全に主観的なものなのに、他人と判断結果が一致するのはなぜなのか。…そういうことを考えるのが「美学」の始まりだと言える。昔は「美学」初学者に『判断力批判』のドイツ語読解は必修だった。当然、学生は既存の翻訳に頼る。私の頃には原佑訳（1）と篠田英雄訳（2）しかなかった。教師には（1）を薦められたが、皆（2）にしがみついた。それでも学生には難しかった。それがなんと昨年、光文社から中山元訳（3）が出た。これはかなり分かりやすい、と思う。某節のタイトルで比較すると、（1）「趣味判断を規定する適意はすべての関心なしである」／（2）「趣味判断を規定する適意は一切の関心にかかわりがない」／（3）「趣味判断を規定する適意にはいかなる関心も含まれない」。（しかも訳者による詳細な解説がWEB版5分冊で出ている。）うーん、今の学生、羨ましい！…しかし、昨今は『判断力批判』は美学学生の必須図書ではないと聞く。2024年。そういえば、今年はいまヌエル・カント（1724－1804年）の生誕300年だ。

●『芸術学ハンドブック』

編集：神林恒道 [ほか], 執筆：神林恒道 [ほか]

私にとって本当に懐かしい1冊。

まだ大学院生だった私に、当時の指導教官、神林恒道先生がお声がけくださり、中の1つの章を執筆した。関西の西洋美術史、美学・芸術学の大学人が、学会でもなく、文科省の「科研」でもなく、まったく自発的に研究会（というか研究発表つきの飲み会？）を楽しんでおり、そのメンバーで「教科書を作ろう」という話しになった。大学の先生たちに、そういう「有意義なお遊び」をする余裕があった古き良き時代の話である。先生方が皆授業でお使いになったからだろう、2015年の第15刷まで増刷が続いた。その先生方の多くもすでに大学職を退かれ、「思い出」の1冊になってしまった。そういえば、執筆当時学生だった私は、何度も何度も指導教授からの厳しいダメ出しを受けて書き直しつつ、かなり凹んだのを思い出す。それで鍛えていただいたと今は感謝している。（そして今、私が自分の学生に同じようなことをやっていたりする。）